

〔仏教の美術展によせて〕

館所蔵の北魏仏 —法隆寺釈迦像との関連—

大和文華館にはいずれも重要な6点の中国・北魏時代の仏像が所蔵されています。その内5点は如来像(残る1点は飛天像)で、個々の対比によって種々の特徴が際立って来ますが、更に、北魏～東西魏の仏像の流れを引くと思われるわが国法隆寺金堂の釈迦如来像(623年の制作)との対比によって見ると、当館の諸像が法隆寺釈迦像の原流としての要素を多々含んでいることが明らかとなります。ここでは、法隆寺釈迦像(図1)との比較によって当館像の重要性を探って行くことにいたします。

時代順に、まず、延興2年(472年)の銘を持つ石造釈迦如来坐像(図2)です。当時の北魏は孝文帝(在位471～499年)の世で、先代の文成帝の世から始まった都・大同の西20キロの地にある雲岡石窟制作の初期であり、仏教興隆の時です。インド僧の来日、北魏僧の渡印などがあり、同様に仏教興隆の時期にあったインドのグプタ朝仏像の影響が及んでいます。本像の丸顔や広いまぶた、右の肩辺りを殆んど露わにする偏袒右肩の着衣法やその流麗な衣褶表現はグプタ朝の(当然ガンダーラ起源

であるが)方法の影響であると言われています。モチーフは異なるが、光背にびっしりと文様をうめこむのもグプタの仏光背に現われています。つまり、インドでは花・唐草文・連弧文など数種のモチーフが頭光をうめています。本像では火焰・化仏・飛天の三種に限られています。以上の諸要素と釈迦の冥想の意味を表わす禪定印を結ぶ手は雲岡の石仏に頻りに登場するものです。釈迦の両脇に小さく表わされる脇侍像は上半身を幾分内側に向けて宝珠を捧げているのだろうか?このように両脇侍像を中尊に比べて極めて小像に彫出することは釈迦の絶対者としての大きさを示そうという意図によるものか?興味は引かれるところ。台座裏側に年号の入った銘文を刻み、張伯張伯という婦人が父母の供養のために造ったとあります。注文によって造らせ、あるいは既に出来合いのものを買って銘文を刻ませ、寺に寄進することは当時の供養の一形態であり、このような一級品を手に入れたのは限られた階級の人々です。仏教そのものが、まだ貴族のものであった時代です。この作品の類品が国内に他に2点

知られ、脇侍像や台座のモチーフなどに少しずつ違いがありますが、偏袒右肩の禪定印坐像であって、光背の形や裏面に釈迦の伝記の一部を刻む点は共通です。このようなインド式の服装は法隆寺釈迦像とは異なる古風なもので、法隆寺像は後に現われた中国式仏衣によっているのです。しかしながら、本像は法隆寺像の三尊形式の源に位置し、脇侍像が宝珠に類するものを手にするのも両者通ずるものがあります。

偏袒右肩の服装をとるもう一例は金銅如来坐像(図3)です。禪定印をとるのも同様です。光背裏面に彫られた同様な印相の像を弥勒仏とみなし、本像を釈迦如来と解することもできます。小像ですので光背は火窟のみを表わし、圈帯の構成も前像とは異なるが、顔はよくみると丸顔で共通し、右肩にわずかに衣端がかかるのも同じです。前像と同じく雲岡の系統を引くものでしょう。頭髪はガンダーラ以来の波形の表現が前像の螺髪とは異り、雲岡初期以来みかけるものです。台座の下下櫃に施された蓮弁の特徴的な連結の方法(∪∪∪∪)は雲岡石窟の教窟に見られるので、そのころの年代(460～486年頃)のものと思われ、台座右側から背面・左側面にかけて記す銘文中の「歲次庚庚」は太和14年(480年)の庚申と考えると良いのではないかと私は考えます。この台座の正面に胡服の人物が供養の蓮花を手にして

中央の香炉に向っています。この人物は他の例によると男女の別が表わされているのではないかと私は考えます。台座にこのような胡服の人物が現われるのは、この頃の仏像によくありますが、孝文帝は太和18年(494年)に拓跋氏の漢化政策のために胡服の嚴禁令を出しています。光背裏面の如来坐像も正面像と同じくインド・ガンダーラ式の服装ですが、こちらは通肩という両肩を完全に覆う形です。形式的なU字形の衣褶であり、特に膝間のU字形表現はガンダーラ後期のものに登場するものです。光背や素朴な蓮華バルメット系台座は正面像と違い、毛髪も波形とせず直線的な毛筋となっています。本像が、段々のある框座の台座を持ち、下櫃に蓮弁を表わすのは法隆寺像に受け継がれています。そして、本像も蘇蘇という人により父母祖父母のために供養されたものと銘文中に記されています。

以上の二像は中国の仏教に及んだ西方の影響を如実に示す例です。

如来の仏頭(図4)は同じく雲岡系といわれ、四角味を帯びた面長の顔やあみずの種の形(杏仁形)といわれる目や微笑を浮かべる口元などが法隆寺像の飛鳥様式に受け継がれています。雲岡盛期の丸顔とは異なる点が雲岡後期(490年以后)とされる理由です。そうだとすると、わが法隆寺像よりは100年以上先行しているのです。

図5の如来立像は、際立った特

図1 法隆寺金堂釈迦如来像



図2 石造釈迦如来坐像



図3 金銅如来坐像



図4 石造仏頭



徴を示しています。高い肉髻・素髪・竊ぎ立った鼻梁や眉・鋭い目・顎の位置まで達する長い耳などは前像とも共通ですが、極めて細長の顔に広い額——私は未だこの類例に出合っていない。北魏後半の龍門石窟(490年開鑿)系のもと言われています。法隆寺像も面長ですがこれほどではありません。手は法隆寺像と同じ施無畏・与願印(慈悲相)をとりますが、これはどの如来もとり得る印なので釈迦像とは断定できません。法隆寺像は光背裏の銘文に「釈迦像」とあります。この像を何より特徴づけているもう一つの要素は服装です。中国式服装ですが、一番上に一枚の布より成る大衣をまとい、その衣端を左腕にかけています。法隆寺像と共通します。ただし、胸前を本像のように異常に長く縦に開いたり、そこにのぞく下着の僧祇支の衿をこのように太く縁取ったU字形に現わす例は少ないのです。僧祇支を締める紐も蝶結びにしてその先を大衣の上に垂らすのも特徴的で、縦に長くという考えがこの像全体を支配しています。僧祇支の衿をこのように太いU字形に見せるのは龍門古陽洞や甘肅省の隴東石窟の仏像に例がありますが、全く同じというわけではありません。下半身の裙(スカート)の裾の鉤状の折れ方にも特徴があります。

これに比べ、柔らかい表現であるのが二仏並坐像(図6)です。法華経中の一シーンで釈迦如来と多

宝如来の並坐を表わしています。この顔の柔和さは法隆寺像にも増すもので、口唇両脇の窪みが深く、強い微笑です。胸前に見せる內衣は前像とも法隆寺像とも異なる独特のもので、衣の両端を結んでリボン状に垂下させ、そのリボンの下に斜目に横切る內衣の衿が見えます。この構成が稀であります。この解明が必要です。大衣と裙の裾を広く台座前に垂下させる裳懸座の制は龍門石窟像において発達したもので、法隆寺像にもみられますが、そちらではもっと厚味を持った布であり、本像では衣は平坦です。懸裳に上半身を隠して、ガンダーラ以来の一對の獅子がみえます。この台座の上櫃の両脇に邪鬼のようなものが上半身をのぞかせて台座を両手で支えるようにしている珍しい例です。両者の肩の間に花形を彫出するのも珍しい。台座裏に孝昌2年(526年)に王氏が父母の為に作ったとあり、472年の像(図2)との隔りを感じます。光背裏に釈迦と馭者のチャンダカと愛馬との別れのシーンを刻んでいます。

以上のように、雲岡・龍門両石窟に属する諸像のインド・ガンダーラ的なもの中国的なものの両要素に法隆寺釈迦像の源流ともみさせる諸点が見出せます。また、独立の像にはいずれの場合も背面に仏伝などの図を表わすというのもわが国には稀な例です。

(村田靖子)

図5 石造如来立像



図6 石仏二仏並坐像

